

GIRLS und PANZER
SISTER☒S

海野入鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西住みほと田尻美沙姫。

天才と称される姉を持つ妹達。

彼女たちはコンプレックスの中、自分の道を探し続ける。

仲間と共に。

友と共に。

目次

プロローグ	初めまして大洗	—
紅茶の女王とぐうたららの姫	—	1
ぐうたらら姫	大洗に着艦する	—
—	—	9
ぐうたらら姫	真昼の決闘	—
—	—	18
戦車道、再開します！	—	—
ぐうたらら姫 vs 悪の組織	—	—
—	—	28
ぐうたらら姫と秘密会談	—	—
—	—	35
プロパガンダ失敗です	—	—
—	—	43

プロローグ 初めまして大洗

紅茶の女王とぐうたららの姫

学園艦。

中学校、高等学校を基本とし、それらに伴う産業、住居などを巨大な空母型の船に集めた乗り物の総称である。

その中の一つに、茨城県にある大洗町を母港とする茨城県立大洗女子学園がある。

三月の優しい日差しが皆さんと差し込む一室、生徒会会長室で身長に合わない豪華な椅子に悠然と座った少女が一人、二枚のA4コピー紙を前ににんまりとほほ笑みを浮かべていた。

少女の名は角谷杏、この大洗女子学園の生徒会長である。

茶色がかかった髪を両サイドで結った、いわゆるツインテールの髪形をした小柄な少女、現在高校二年生。

指で机をトントンと叩きながら満足げに何度も二枚のコピー紙に目を通して行く。

「西住みほに、田尻美沙姫かあ。これで何とか立ち上げの準備は整うかなあ。……まさか紅茶の女王様からこんなプレゼントを貰えるとは。何かお礼しないとなー。何にし

よっかなあ」

目を細めながら嬉しそうに杏は誰も居ない部屋で呟いた。



時は僅かに遡り、今は十一月中旬。

神奈川県横浜市のとある閑静な住宅街の一室は重苦しい空気に包まれていた。

「ごめんね凜子（りんこ）、急に呼びだして」

そう言ったのは、年は四十手前、腰まであるつややかな黒髪を首筋辺りで一つに括りメガネをかけた女性だった。

「いいえお母様。それで何用で？　と言っても一つしか思い浮かびませんが」

金色の髪をシニヨンにし、学校の制服と思われる濃い藍色のセーターとスカイブルーのスカートをつなげた少女は紅茶の入ったカップに口をつけながら答える。

少女の言葉からこの二人は母娘であり、何らかの相談の為、娘を呼びつけたと推測される。

母親は神妙な表情で娘の前に封書の一つ差し出した。

娘、凜子はカップを皿に戻し両手を開けると封書を手に取り、中の書類に目を通す。

書類は三枚あった。

一枚目は成績表、二枚目は担任からの報告書、そして三枚目は将来に向けての進路調査表。

凜子は一枚一枚丁寧に目を通して行つた。

時折「あら」や「まあ」などと呟いていたが、三枚目の書類でついに我慢が出来なくなり嘔き出してしまふ。

「かねがね愉快な娘だとは思っていましたがここまでとは。我が妹ながら賛辞を送りますわ。ハラショー」

そういつてパチパチと拍手をする。

茶化す様な娘の行動に母の堪忍袋も限界を迎える。

「あなたね。妹の危機なのよ、もうちよつと真面目に心配したらどうなの」

「だって愉快じゃありませんか？ 勉強の方は選択科目以外全滅。授業態度は居眠りばかりで先生の言葉など聞きもしない。そして将来の進路はニート。ワザとでなければ何だつて言うのかしら？」

凜子の言葉に母親の口は開いたまま閉じる事を忘れた。

「わ、ワザとって、ホントに?」

母親の問いに凜子は紅茶に口を付けながら

「恐らくは。ねえお母様、こんな言葉を知っているかしら? 女の子は何でできている

? お砂糖とスパイスと素敵な物でできている」

「マザーグースだったかしら?」

「ええ。でも今のあの娘はお砂糖と素敵な物しか持つてはいない。あの娘に一番大切なスパイスを無くしてしまっているの」

「それがこう言う結果と言う訳?」

母の問いに凜子は頷く事で返事を返す。

しかし困ったのは母親の方だった。

スパイスを与えると言っても何をどうしたらいいのか。

頭を抱え唸り続ける母親に凜子は楽しげに声をかける。

「進路は一つだけではありませんわ。戦車はどんな所でも進んで行く。聖グロリアーナだけが進路では無いのですから」

「あなたは他に良い学校をしまっているの?」

まるで恐る恐る蜘蛛の糸を手繰る様に母親は口を開く。

その言葉が引き金になったかの様に凜子は立ち上がると部屋を出、電話のダイヤルを

回す。

数回の呼び出し音の後、目的の場所へ繋がった。

凜子は自分の身元を話し、目当ての人物へと取次を頼む。

ほどなくして目当ての人物と繋がる。

「お久しぶりです。夏の学園艦総会以来ですわね」

『……………』

「何の用？ そう仰らないで下さいな。あなたの所の事情を耳にしまして、その為に戦車道を復活させる事も」

『……………』

「ふふ。壁に耳あり、障子に目ありと申しますでしょう。それで、人材は集まりましたの？」

『……………』

「でしようね。ならば妹を預かっては頂けないかしら？」

『……………』

「ええ。真正正銘のわたくしの妹ですわ。名は美沙姫（みさき）」

『……………』

「腕前？ それは保障致しますわ」

『……………』

「悪だくみなどしていません事よ。美沙姫にはスパイスが必要なのです。必死になるほどの。だからあなたの所でこき使ってやっていただけるかしら」

『……………』

「お礼？　いりませんわ。ただ、戦車道が立ち上がったらウチと試合をして頂きたいですわね。」

『……………』

「ええ。ではそのように」

その言葉を最後に凜子は受話器を置き、母親の下に帰って来た。

「凜子、どこに電話を？」

心配そうに母親が尋ねる。

凜子は何事も無かった様な態度で紅茶に口を付けると

「美沙姫の進路の打診を少々」

「進路って高校の？」

「ええ。ちょうど良いスパイスの詰まった学校がありましたので」

「どこ？　どこの学校なの？」

母親は顔を近づけながら焦った様に質問を繰り返す。

逆に凜子は涼しげな表情を崩さず

「大洗女子学園。来年度で廃校になる予定の学校ですわ」

「な！ あなたは妹を廃校になる学校に行かせる気なの」

母親はさらに顔を近づけ話を続ける。

「ええ。ですが戦車道の全国大会で優勝すれば、廃校は撤回されるそうですわよ」

「あなたの所とぶつかっただらどうするのよ。可愛い妹の為に負けてあげるの」

「いいえ。徹底的に潰しますわ」

母親は凜子から顔を離し天井を見上げると

「それでは廃校が決まったものじゃない」

母親のこの言葉を受け、凜子は今までの優雅な表情から厳しい表情に変わる。

「無名の高校で全国大会の決勝出場。それくらいの勲章が無ければ美沙姫はずっとディ

ンブラと言われますわ」

「ディンブラ？」

「紅茶の名前ですわね。誰からも好まれる飽きの来ない味」

「良いニツクネームじゃ無いの」

母親はキョトンとした表情で素直な感想を口にする。

しかし凜子の表情はさらに引き締まった物に変化する。

「本当にそうお思い？　ダージリンに比べ個性や品格が劣ると言われる茶葉の名でも？」

凜子、いや聖グロリアーナ戦車道次期隊長ダージリンの言葉で母親は全てを理解した。

現在中学三年生の美沙姫が、このまますんなり姉の居る聖グロリアーナに入学すれば、心無い陰口でつぶれてしまうかも知れないとダージリンは言っているのだった。

だからこそ、余所で箔を付けさせると。

「あの娘は、美沙姫はディンブラではありませんわ。あの娘はキャンデイ、スパイスを加えれば魅力的な味を出す素敵な物をたくさん持った自慢の妹」

こうして母と姉の密談は終了し、田尻美沙姫は大洗女子学園の門をくぐる事になる。

西住みほと、田尻美沙姫、天才と称される姉を持つ妹達の物語の歯車が静かに回り始めた。

ぐうたら姫 大洗に着艦する

田尻美沙姫が姉と母の勧めにより、見事茨城県立大洗女子学園に合格し、引っ越しも無事終了してから一週間が経っていた。

最初両親は美沙姫を寮へ入れようと計画していたのだが、姉の「それではぐうたら癖が治りませんわ」と言う神の一言で通常のワンルームマンションでの一人暮らしとなっている。

しかし思慮深さでは超高校級のダーズリンでさえ、田尻美沙姫と言う少女を見誤っていた。

彼女のぐうたら癖は八十八ミリ砲クラスの破壊力を持っていたのだ。

大洗学園艦に来てから一週間、彼女は一步も自宅から出てはいなかった。

薄いよれよれのTシャツに、下はパンツ一枚の姿で、ずっとベッドの上でもぞもぞして過ごしていた。

艶やかなプラチナブロンドの髪は手入れもされずぼさぼさで、食事にはたっては全てシリアル。

それもミルクなど一切入れずに。

そんな感じで七日間を過ごし、今日もそんな感じで過ごそうと美沙姫は決めていた。今の彼女には全てがどうでもいい事だったから。

たどり着きたい未来も無く、進みたい道も無い。

全てを投げ出し諦めてしまっていた若干十五歳の少女に残っていた僅かな光、それは戦車道。

しかし、この大洗女子学園にはそれすらも無かった。

だから放棄した。

全てを。

考える事さえも。

少しでも頭を働かせればあの言葉が浮かんでくるから。

デインブラと言う名前が。

だから美沙姫は今日もぐうたら過ごすと決めていた。

しかし世の中そんなに上手く事は運ばない。

美沙姫、少し離れてみると大きなエノコロ草に見える彼女が寝返りを打つと、不意に背後から聞きなれた声があった。

「起きなさい」

姉の声が聞こえる。

しかしそんなはずは無い、ここは大洗の学園艦だ。
聖グロリアーナに居るはずの姉がいる訳が無い。

美沙姫は、自分自身の心の弱さが聞かせる幻聴だとの考えにたどり着く。
だが、もう一度あの声が美沙姫に語りかける。

「起きなさい」

ああ、此処まで自分の心は弱っていたんだと美沙姫は悲しくなった。

「……お姉ちゃん」

美沙姫はポツリと呟く。

その瞬間、うつぶせで布団にくるまっていた自分の背中に何かの勢いよく乗って来た。
た。

「ふぎやー！」

「お姉さま。そう呼ぶように言ったでしょ、美沙姫」

美沙姫はエビに仰け反り自分の背中に乗っている人物を確認する。

そこには聖グロリアーナの制服を纏った実姉、ダージリンの姿があった。

「あら、あなたは
大洗女子に入学したものと思
っていましたが、入学したのは
雑技団でしたのね」

ダージリンは背中から降りよう
とせせず、愉快そうに言葉
を投げかけた。

そしてこう言葉が続ける。

「出かけますわよ」

「……はい？」

「出かけます」

「……………いや」

「で・か・け・ま・す」

「いやー！」

「出かけます、美・沙・姫ー！」

そう言つてダージリンは美沙姫のパンツを思いつき引つ張つた。

「いやー！」

この行動によつて美沙姫の同年代の少女達よりも育つた臀部と股間にパンツが喰い込んだ。

美沙姫は悲鳴を上げるが、ダージリンは手を離す気配は無い。

それどころか、美沙姫の綿の白パンを見つめながら呆れた様な言葉を漏らす。

「あら、何この三枚千円の様なショーツは。淑女は下着にも気を配りなさいといつも言っているで、しょ」

弾む様な声と共にダージリンは、さらに下着を引き上げた。

「ひゃうん！　だ、だつて三枚千円だもん！　わたし中学生だもん！　巡航戦車に乗つてると、すぐ穴が開くんだもん！　マチルダと違うもん！　チャールズじゃ無いもん！　クルセイダーだもん！　離してだもん！　お姉ちゃんだもん！」

美沙姫は早口で言葉を吐き出す。

だが、相手はダージリン。

ちよつとやそつとでは攻め手が緩む事は無かつた。

「お姉さま。でしよ？」

そう言つて掴んだパンツをぐりぐりと揺らす。

「あひゃひゃ！　離してダー様！」

「ダージリンお姉さま」

「離せー！　紅茶格言！」

美沙姫のこの言葉にダージリンの形の良い眉がピクリと跳ねた。

そして同時に……………あり得ない程の力でパンツを引き上げる。

美沙姫の股間に食い込むそれは、もはや紐と言える物になつていた。

「あ—————！」



「うう、ひつく」

「何時まで泣いているの」

「だって、だって」

ダージリンと美沙姫は、部屋での百合百合なイチャコラを終え商店街へと続く道を歩いていた。

前を歩くダージリンは部屋と同様に青を基調とした聖グロリアーナの制服を着用しており、後からベソをかきながら付いて行く美沙姫はめでたく入学が決まった大洗女子学園の制服を纏っていた。

緑をメインカラーとしたセーラー服が大洗女子学園の制服だ。

しかし、同年代の少女達よりも若干発育が良い美沙姫が着用すると、長く艶やかな金髪と相まって何と言うかコレジャナイ感が微妙に滲んでいた。

「もう、いつまで泣いているの。何か買ってあげるから泣きやみなさい」

ダージリンは自分ののでかした事を棚に上げ、うんざりした様な声で美沙姫に語る。

美沙姫は美沙姫で、何か買ってもらえるとと言う甘い言葉ですぐに機嫌を良くし欲しい

物を声高らかに姉におねだりした。

「じゃあ、キヤデラック！」

「………………。行きますわよ」

実妹の残念な発言をスルーしてダージリンは優雅に進んで行く。

無視された形になった美沙姫はとぼとぼと後に着いて行くしかなかった。

目的地も知らずに。

キヨロキヨロと辺りを見回しながらダージリンは歩いて行く。

部屋を出てからそれなりの時間が経っているのだが、どうやら目的の場所は発見できない様であった。

どうしようかと思ひ悩むダージリンの前に、少女が二人こちらに向かって歩いて来るのが見えた。

一人は、明るいオレンジ色にも見える茶髪をセミロングの長さで整えたふわふわした如何にも女の子が好みそうなワンピースを着た少女。

もう一人は艶やかな黒髪を腰辺りまで伸ばした凛とした空気を纏ったパンツ姿の少女。

恐らくはこの学園艦に住んでいる少女達だろうと思ひ、ダージリンは声をかける事にした。

「もし」

「わっ!」

「はい?」

突然声をかけられた事に茶髪の少女は驚きの声を上げる。

だが、黒髪の少女は落ち着いていた。

この反応の差から、話しかけるは黒髪の少女だとダージリンは確信する。

「もし。この辺りに美容院は無いかしら?」

「美容院?」

「ええ」

ダージリンの問いかけに二人は同時にオウム返しに言葉を返して来る。

だがすぐに頭を巡らせ答えを返してくれた。

「この辺りには無いとおもうよ」

ダージリンの最初の印象とは違い、答えて来たのは茶髪の少女だった。

「そうですわねえ、美容院はもう少し商業部の方へいきませんとお」

黒髪の少女が補足を入れる。

「そう」

「あ、でもお」

黒髪の少女が何かを思い出したように口を開いた。

「この道を入れて行つた辺りに床屋さんがあつた様な……」

「ああそう言えば」

「床屋……。ありがとう御座います。美沙姫、行きますわよ」

もたらされた情報にダージリンは何かを決め、優雅に一礼すると美沙姫を引き連れその場所を目指した。

二人の姿が視界から消えると茶髪の少女が口を開く。

「ねえ華、今の人聖グロリアーナの生徒だよね」

「制服から見ますとー。でも一体何用なのでしょうか？ もしかして殴り込みとか？」

「後の娘がウチの制服着てたから普通に遊びに来たんじゃない」

そう言つて笑い合いながら二人は歩きだした。

ぐうたら姫 真昼の決闘

「到着」

ダージリンはクルクル回る理髪店の象徴とも言えるサインポールを見つめながらポツリと呟く。

しかし美沙姫には、なぜ姉が此処を訪れたのかの理由がさっぱり解らなかった。辺りを見渡した後、ゆっくりと視線を上方に向けて行く。

そこにはこの店の名が記された看板が掲げられていた。

「秋山理髪店」それがこの店の名前。

そんな美沙姫の事など知った事かと言う様にダージリンは店の扉に手を掛ける。

カランと言う明るいベルの音と共に扉は開け放たれた。

その瞬間美沙姫はシャンプーとコロンの香りに包まれる。

美容院とは似ているようで違う香りに。

クンクンと心地いい香りを満喫する美沙姫に店内から声がかかる。

「美沙姫。何をしているのかしら？ 早くお入りなさい」

姉からだった。

美沙姫は慌てて店内へと足を踏み入れる。

そして立塞がる姉にこの状況を説明させる事にした。

「おねーたま？」

「お姉さま」

「それで、そのおねーたまは、床屋さんにも何の御用なので御座いますですか？」

「解らない？ それから変な言葉づかいはおやめなさい。馬鹿にみえましてよ」

「そうですか。それから、ご質問の件ですが、わかりません」

ダージリンは「そう」と一言呟くと店の主人と思われる男性に声をかける。

「ご主人」

「は、はいー！」

呼ばれたこの店の主人、秋山淳五郎は慌てて返事を返す。

何を慌てているのかと思う人もいるかも知れないが、これは当然の事だった。

この秋山理髪店のお客さんは95%と言って良いくらい男性客だった。

その年齢層も、この船の核になっている学校が女子高のせいかな年齢層も高めの人達が

ほとんどだ。

残り5%も妻である秋山好子による着付けなどのお客様だった。

そしてそちらも年配の方が多かった。

そんな秋山理髪店に突然乱入して来たのが金髪の美少女なのだ、驚きで固まってしま
うのも仕方が無い事だろう。

だが、ダージリンは周りの空気など気にも留めずに会話を続ける。

「ご主人、場所をお借りしてもよろしいかしら？」

ダージリンのこの言葉に淳五郎は何度も頷く事で了承の意を示す。

それを確認し、ダージリンは姿見の前で美沙姫に向け手招きをする。

美沙姫は首を捻りながら、文句を口にする事無く素直に姿見の前に立つ。

「ほら」

自分を見て御覧なさいとダージリンは言葉をかける。

が、美沙姫には何が何やら解らず首を捻るにとどまった。

「あなたね……良く見てみなさい、自分自身の姿を。今のあなたはさしずめ豪華な貞子、
もしくは巨大な猫じやらしですわよ」

「へ？」

美沙姫はじつと姿見の中の自分自身を見つめた。

伸ばし放題に伸びた髪はお尻辺りまで届き、前髪は暖簾の様に顔を隠していた。

確かに姉の言う通りプラチナブロンドの髪ゆえに、豪華な貞子である。

そして秋風に揺れるエノコロ草でもあった。

「ああ、なるほど」

美沙姫口からポツリと肯定の言葉が漏れた。

ダージリンはその言葉を待ってましたと言わんばかりに、美沙姫の手を取ると散髪用の椅子に座らせた。

美沙姫の両肩をがっちり逃がさない様にホールドすると、淳五郎に言葉をかける。

「ご主人、遠慮は無用。やっていただけるかしら？」

ダージリンのこの言葉に淳五郎の視線は驚きを隠す事無く、ダージリンと美沙姫の間をさまよう。

好子も心配してダージリンに話しかける。

が、ダージリンの答えは「大丈夫ですわ」だった。

髪の高さは自分と同じぐらいだとシニオンをほどこき注文を付ける。

美沙姫もこれ以上の問答は無駄だと感じ、淳五郎に覚悟完了の意志を告げた。

こうなつては淳五郎も腹を括るしかなかった。

だが、淳五郎はおしゃれな髪形など知る由も無い。

女の子の髪など自分の娘以外は切った事も無い程の、女性とは無縁の床屋さんだった。

だから淳五郎はダージリンの髪形を忠実に再現する事を心がける。

チャキチャキと理容鋏が軽快な音を立て美沙姫の髪を切って行く。

後ろからは姉の語る英国話が聞こえて来る。

イギリスではとか、イギリスのくと姉は好子に語っていた。

ダージリンのこの調子に乗っているととも言えるイギリス話に美沙姫はイラツとした。

そして淳五郎にだけ聞こえる様に口を開いた。

「ご主人、ウチの姉はあんな事言ってますが、実は……………あの人イギリス行つた事無いんですよ。ぶぶっ」

その瞬間、好子と楽しく話していたダージリンの眉がピクリと跳ねた。

「それにですね、もうすぐ出ますよ。あなた、こんな言葉をしってる？ って。ぶぶー」

言いながら美沙姫は止まらなくなっていた。

だから油断してしまった。

決して油断してはいけないタイミングで。

調子に乗っていた美沙姫の耳にバチン！と言う音が響いた。

そして……………目の前が明るくなった。

ハラリハラリと美沙姫の目の前を髪の毛が落ちて行くのが見える。

前にある鏡には姉、ダージリンと瓜二つな自分の顔が映っていた。

何があったのか、それは調子に乗り過ぎた美沙姫は言っではいけない事をずけずけと

発信した揚句、お仕置きされたのだ。

今、美沙姫の前髪は：……………眉毛と同じ位置までしか無かった。

そしてその毛先は、横一文字、パツツンと呼ばれるあり様であった。

横に立つダージリンは、理容鋏をチャキチャキと鳴らしながら楽しそうに美沙姫に話しかける。

「あら、素敵な髪形ね美沙姫。まるでキャベツ人形みたい。かわいいわよ」

姉よりも僅かに明るい髪色、姉と同じ透き通る様な蒼い瞳、そして、姉とは似ても似つかない前髪の長さ。

「……………いや……………」

美沙姫の絶叫が秋山理髪店を包みこんだ。

その瞬間、二階で扉が開く音が響き、階段をものすごいスピードで降りて来る音がした。

「どうしたのでありますか！ 一体何が？」

ふんわりした癖つ毛と、人懐っこさを感じさせるたれ目気味な大きな瞳が印象的な少女が顔を出した。

少女は店内をぐるりと見渡すと、一人の少女に目が留まる。

「ダ、ダージリン殿！」

少女の大声が響く。

そして視線は理容用の椅子の上でバタバタと手足をバタバタかせながら泣きじやくる少女の方へ。

「へ、こつちにもダージリン殿！」

癖っ毛の少女の眼に映る二人の少女は、同一人物に見えた。

優雅に鉢をもてあそぶダージリンと椅子の上で泣きじやくるダージリンが。それほどまでに二人は似た者姉妹だった。

「あなた、わたしの事をご存じで？」

「びえー」

聖グロリアーナの制服を着たダージリンが癖っ毛の少女に語りかけた。

「あ、はっ、はい。私、戦車が大好きでありますから」

「びえー」

癖っ毛の少女はビシツと敬礼のポーズで答える。

が、なぜか声は尻すぼみに小さくなっていった。

ダージリンは鉢を元あった場所に戻すと癖っ毛の少女と向かい合う。

「あなた、お名前は？」

「びえー」

「あ、私は……私は秋山優花里と申します、ダーズリン殿」

「びえー」

「では優花里さん、あなたは、御年は？」

「びえー」

「はっ、今春から二年生の十六歳であります。」

「びえー」

「そう。美沙姫、うるさいですわよ」

「びえー」

「美・沙・姫」

姉の冷静な言葉に、美沙姫の堪忍袋の緒が切れた。

「どーすんの、もー、どーすんの！ 入学式は明後日だよ！ こんなんじや学校いけないよー！」

美沙姫の矢継ぎ早の言葉に、ダーズリンはため息を一つ吐くと

「解りました。何か買ってあげるから泣きやみなさい」

「じゃあロールスロイス！運転手つきで！」

「……………解りました。何とかしましょう」

「へ？」



美沙姫の髪形は秋山理髪店総出でのカットで何とか姫カットと呼ばれる物で落ち着きをみせた。

今、美沙姫とダージリンはマンションへの帰路についていた。

秋山優花里と共に。

「それでは優花里さんは二年生になられるのですわね」

「はい！そうであります」

ダージリンの問いに由佳里は元気よく答えた。

「どうやら由佳里は戦車道における有名人に会えてテンションが上がっているようだ。」

「優花里さん、美沙姫の事よろしくお願いしますわ。手のかかる娘ですが」

「私に出来るかどうかはわかりませんが、精一杯お世話いたします！」

そう言つて敬礼のポーズをとり、にっこりとほほ笑んだ。

美沙姫はその笑顔で少し心が軽くなる思いだった。

こんな笑顔が出来る先輩となら、何かが変わるかも知れないと言う期待が持てた。それを知る事が出来ただけでも、今日と言う日は有意義だったのだろうと。

戦車道、再開します！

ぐうたら姫 v s 悪の組織

美沙姫がここ大洗女子学園に入学してから一週間が過ぎようとしていた。

そしてもう一人、運命の渦に翻弄されたかの様にこの場所に導かれた少女も転校して来ていた。

後に語られる “大洗の奇跡” へと少女達を導いた戦女神（バトル・プリエステス）と、その傍らで戦場を混乱に導いた戦姫（バトル・プリンセス）の物語は今、幕を上げる。



く大洗女子学園・生徒会・会長室く

「会長、準備整いました」

うつすらと日差しが差し込む会長室で、三人の少女が少し緊張した表情で言葉を交わ

していた。

最初に発言した少女は、河嶋桃。

黒髪のボブカットとつり目がちな瞳が知的な印象を映す、生徒会の広報担当で右目のモノクルが一番の特徴であろう。

「でも、これでは情報操作では無いでしょうか？」

異議を申し立てたのは小山柚子。

茶色がかつた髪をポニーテールにした、母性を強く感じさせる少女。

ちなみに生徒会副会長でもある。

「だーいじよぶ、だーいじよぶ」

呑気な声を上げるのは、生徒会長の角谷杏。

だが、彼女の次に発せられた言葉は少し沈んだ物だった。

「全生徒へ向けてはそれで良いとして、でもさ、西住ちゃんの方は少し待とつか。あの子の転校の理由を考えるとさ」

そう言つて寂しそうな笑みを浮かべる。

「承知しました。では、田尻の方は？」

直立姿勢で桃が問いかける。

問われた杏は、今の今までしていた表情を一変させると

「ああ、そっちは大丈夫。なんなら今から拉致りに……、いやいや勧誘にいこっか」
そう言つて満面の笑みで生徒会長室を後にした。



美沙姫達、新一年生の浮かれていた気分も一段落し、クラスメイト達とも気兼ねなく話せる様になっていた。

そんな日常の昼下がり、学食でお昼ごはんを食べ終えた美沙姫はクラスの自分の席でのんびりとだらけていた。

「美沙姫さんのく、髪はく、きれいですわねく」

ゆったりした言葉遣いで話しながら美沙姫の髪を梳かすのは二階堂蘭子。

黒髪のボブカットで、動作の一つ一つが優雅で流れる様な動きを見せる、大和撫子やお嬢様と言つた言葉が良く似合う少女。

「そうだよねー。髪型もお姫様みたいだし、どこの美容院行つてんの?」

「ははっ」

この問いに、美沙姫は乾いた笑いを口にしつつ目を反らした。

さすがに床屋で姉と大喧嘩をした結果だとはとても言えない。

そして、質問したのは小林寿子と言う少女。

明るい茶髪をベリーショートにし、入学早々自動車部へと入部した無類の車好き。

将来の夢は、ル・マン24での優勝と、F1のワールドチャンピオンらしい。

人懐っこい性格のようで、最初に美沙姫に話しかけたのも彼女だった。

皆がのどかなお昼休みを過ごしていたまさにその時、教室の扉が乱暴に開かれ何者かが乱入して来た。

人数は三名、恐らくは上級生だと思われる。

その者達は教壇の前で横一列に並ぶと、中央のツインテールの少女がグルリと教室内を見渡し頷いた。

それが合図だったのか、向って左側に立っていたモノクルを掛けた少女が口を開く。

「二年C組、田尻美沙姫。前へ」

凜と張った声だった。

しかし、誰も立ち上がろうとはしなかった。

「二年C組、田尻美沙姫。前へ」

もう一度声がかかる。

が、同じ結果だった。

モノクルの少女は、苛立った様な表情を浮かべながら美沙姫達の前まで来ると

「二年C組、田尻美沙姫。前へ」

同じ言葉を繰り返す。

だが美沙姫は涼しい表情で左右に視線を向ける。

まるで誰かを探している様に。

モノクルの少女は机に激しく手を叩きつけると

「田尻美沙姫！ お前の事だ！」

しかし美沙姫はニツコリとほほ笑むと

「田尻さん？ 人違いですよ、せんばい。わたしは足立です。田尻さんはたぶん、まだ学

食じゃないでしょうか」

「え？ そ、そうなのか」

モノクルの少女はギョツとした表情をした後、背後に控えるツインテールの少女に助

けを求める様な視線を向けた。

ツインテールの少女は一度目を瞑ると不敵な笑みを浮かべながら、美沙姫の前まで来

ると囁く様に口を開く。

「田尻ちゃん。いや……………ミサキちゃん。あんまり駄々をこねてると保護者

の方に連絡が行くよ。例えば……お姉さん、とか」

この発言で、美沙姫の背筋に悪寒が走る。

「ま、まさか、お前達は紅茶格言の回し者か……」

「なんだ、その缶入り飲料の様な名前は」

美沙姫の姉に対しての悪態にモノクルの少女が突っ込みを入れた。

「いやー、そう言う訳でも無いんだけどねえ。あつと、私は生徒会長の角谷杏だ。そう言う訳で、小山、河嶋」

「はい！」

杏の号令で柚子と桃は美沙姫を両側から拘束した。

「確保！」

「しゅっぱーっ」

「へ？」

杏の掛け声と共に美沙姫はずると引きずられ教室を後にした。ずると、ずると、ずると美沙姫は連行され続けていた。

「はーなーせー！」

「黙って同行しろ！」

河嶋桃の櫛が飛ぶ。

「はーなーせー!」

「黙って歩いた方がいいと思うよ。ね。ね。」

小山柚子が優しくたしなめる。

「まーまー。ミサキチも落ち着いて」

角谷杏生徒会長が仲裁に入る。

「うるさい! はーなーせー! 紅茶格言の手下どもー!」

ギャーギャー、ワーワーと四人が仲良く言い争っている光景は全校生徒の注目の的となった。

一年生の教室の前を、二年生の教室の前を、そして三年生の教室の前を通り過ぎて行く。

入学七日目、田尻美沙姫は学校中で知らぬ者は居ない存在になった。

……………悪い意味で。

ぐうたら姫と秘密会談

「それで、一体わたしに何用ですか？」

生徒会に拉致、いや同行を求められた美沙姫は、現在生徒会長室でティーカップ片手に優雅にたたずんでいた。

「お前は何をやってる！」

美沙姫の行動に河嶋桃が突っ込みを入れた。

だが、相手は美沙姫。

あの紅茶の女王の妹なのだ。

いくら狂犬と一部では噂される河嶋桃の言葉でも、微塵も怯みはしない。

美沙姫は「何がですか？」と返事を返ししながら、ティーカップを左手に持ったソーサーに戻す。

カタッ？

美沙姫の掌の辺りから硬い音がした。

そしてその音は続けざまに、カタカタカタカタ……。

「震えてるじゃないか！」

実は、田尻美沙姫は気が小さかった。

河嶋桃にその事を指摘された瞬間、美沙姫の感情が爆発する。

「だって、だって！ みんな見てたもん！ 注目してたもん！ さらし者だもん！ 先輩達わたしの名前、連呼してたもん！ びえー！」

大泣きである。

床に転がりバタバタと。

十五の少女が、傍から見ればとびっきりの美少女がやる事では無い。

しかしそれが田尻美沙姫という少女なのだった。

生徒会の三人は、この光景を黙って見つめていた。

その視線の意味する物は、残念な娘、だった。

さて、この後どうするべきか、そう言う空気が支配する生徒会長室のドアがノックされる。

「ほいほーい。あいてるよー」

ガチャリと重い音をさせながらドアが開き、ふんわりした癖つ毛の少女が申し訳無きように部屋を覗き見た。

「あの一。こちらに私の知り合いが捕縛されていると……」

そう言ながら部屋の中へと視線を向けた。

そして、その視線の先には……大の字で床に転がっている美沙姫の姿があった。
「み、美沙姫殿！」

駆け出す様に美沙姫に近づき、介抱するかの様に腰を降ろし呼びかけた。

「美沙姫殿！ 大丈夫でありますか！」

急に自身の名前を呼ばれた美沙姫は目をパチクリさせると、じつと癩つ毛の少女を見つめ

「あ、わんわん」

「誰がわんわんですか！ 私ですよ！ 秋山優花里でありますよ！」

突っ込みを入れる優花里に対して、美沙姫はにんまりとほほ笑むと、掌をひらひらさせながら

「じょうだんですよお。お久しぶりですね、秋山先輩」

「はい！ 久しぶりであります」

この時、和気あいあいと微笑む二人に対して注意喚起する者がいた。

我らが狂犬、いや、広報の河嶋桃である。

「キサマらあ！ 何をいちゃいちゃしている！ そしてお前はだれだ！」

指をさし、そしてその指をブンブンと振りまわしながら河嶋桃は声を荒げる。

美沙姫はその光景を他人事の様に見つめながら

「せんばい、そんなにキャンキャン吠えるとチワワみたいですよ」

「誰がチワワだ！」

「ひいー！」

空気の読めない無駄なやり取りを展開していた。

それを見たせいなのか、人見知りで普段なら緊張で上手く言葉が出てこない優花里なのだが、何の迷いも無く立ち上がる事が出来た。

踵を鳴らす様に直立不動の姿勢で、右手で敬礼の姿勢を取ると、はっきりした声で名乗りをあげる。

「はっ！ 自分は普通Ⅱ科二年C組、秋山優花里であります！」

「それで、その秋山ちゃんが何の用かなあ？」

角谷杏生徒会長が生徒会役員を代表する様に言葉を返す。

「はい。自分の目的は捕虜の生存確認と奪還であります！」

「言うねえ」

角谷杏は頬杖をつきながら、楽しそうに頬を緩ませた。

「ならば、捕虜の返還に対しての政治的な交渉を始めようじゃないか。良いかい？ 秋

山ちゃん」

「はいっ！」

そう言つて二人はガツチリと握手を交わす。

その一方では……

「桃ちゃん先輩、わたし……捕虜だったの?」

「知るか!」

不毛な漫才が続いていた。



「実はさあ、これからする話しは二、三日黙つててほしいんだよねえ」

場が落ち着き、皆でソファーに移動した後の角谷杏の第一声がこれだった。

言葉を発した角谷杏は少し緊張したかの様な表情をしている。

他の二人も同様だった。

「そ、それは構いませんが」

優花里はゴクリと喉を鳴らし返事を返す。

「田尻も良いな」

河嶋桃が美沙姫に確認を取る。

「ほーい」

「返事は、はいだ！」

「は、はい！」

「会長、了承の確認が取れました」

この言葉を受け、角谷杏は一つ頷くとゆっくりとした口調で口を開いた。

「数年後に、戦車道の国際大会が開かれる話って、知ってるかな？」

「噂では聞いた事がありますが」

杏の問いに優花里が答える。

「うん。それで、文科省の方から各学校に対して戦車道に力を入れる様にとお達しが下ってね。我が校としては、今年から戦車道を復活させようと思っている訳」

「戦車道を、でありますか！」

「そうだ。だが、我が校には戦車道の履行歴がある者は二人しかいない」

会話の流れを河嶋桃が引き継ぐ。

「あつ」

だが、この言葉に対して優花里は小さな呟きを漏らす。

何か思い当たる事がある様だった。

だが、それ以上は言葉が続ける事は無かった。重い沈黙が部屋の中を支配していく。

この場に居る全ての者が、優花里の眩きの意味を知っていたからだった。

いや、ただ一人意味を解していない者もいるが。

しかし、黙ったままでも居られない。

そんな中で真っ先に口を開いたのは、今まで成り行きを見守っていた小山柚子だった。

「そ、それでね、田尻さんに戦車道を履行して貰えないかと思つて来てもらったの」

「せんしゃどう……」

美沙姫の眩きに、柚子は身を乗り出し説得を試みる。

「そう。どうかかな?」

「どーしよつかかなー」

柚子の渾身の願いに対して、美沙姫は焦らす様な態度をとる。

どんな世界にでも学習しない人間とは居る者で、美沙姫もこのタイプである事はすでにご存じであろう。

だいたい、この田尻美沙姫と言う少女は姉と違つて非常に調子に乗りやすいのである。

そして、その後大体酷い目に会っている。
今回もまたそうであつた。

「みさきちー。ほれ」

角谷杏が一枚の紙を美沙姫の目の前に差し出す。

それを受け取り読み進める美沙姫の顔色はどんどんと変化していった。
悪い方へと。

美沙姫は読んでいた紙をクシヤリと握り潰すと、おもむろに立ち上がる。

そして、ゆつくりと角谷杏に近づくと、床に正座し礼儀正しく頭を下げ
「田尻美沙姫……戦車道、やらせて頂きます」

声高らかに宣言した。

生徒会役員達は満足げに頷く中、優花里の耳には小さく

「おのれ、紅茶格言」

と言う恨みの言葉が聞こえていた。

プロパガンダ失敗です

「本当に良いんでしょっか？」

選択科目のオリエンテーションを控え、学生一同が集まった体育館の用具室で小山柚子が不安げに呟いた。

「ん？ だーいじようぶ、だーいじようぶ。嘘は言つてないから」

何の心配も無いと生徒会長である角谷杏は答える。

だが、小山の視線は別の物へと向けられていた。

視線の先にある物は？

用具室の床に転がる、荒縄でぐるぐるに巻かれた田尻美沙姫であった。

ビチビチと跳ねまわるその姿は、一本釣りで船に上げられたマグロの様である。

「あー、田尻。少し静かにしろ」

河嶋桃の冷静で冷たい言葉が飛ぶ。

「うー！ うー！」

「何を言っているのか解らんな」

そう言いながら、河嶋桃が美沙姫の猿轡を解く。

その瞬間

「なにすんだー！ この悪党！ 人でなしー！」

思いつきりの罵声が美沙姫の口から放たれる。

その声に反応する様に、角谷杏が美沙姫の正面に腰を落とす。

「みさきち、ちよーつと黙ろうか」

言いながら邪悪な笑みを浮かべた。

「な、何をする！ 改造か？ 改造だな！ 私をバツタにする気だな！」

「何にもしないって。ちよつとだけ協力してもらうだけ」

そう言って床に置いてあつた袋から一着の服を取り出した。

「そ、それは……」

「しつかりやってよねー。上手く行ったら、ほしいもあげるから」



“戦車道。それは乙女の嗜み——”

照明が落とされた体育館に、小山柚子の声が響く。

それと同時に、スクリーンには見目美しい少女達が、隊列をもつて戦車で行軍する映像が映される。

その映像を真剣に見る者、興味無さげな者、うつむき見ない様に務める者、生徒達の反応は様々であつた。

一様の説明と映像が終り、舞台上には小山柚子だけが取り残され、スポットが当たる。小山柚子はコホンと一つ咳払いをすると、マイクに向かって口を開いた。

「えー、以上の説明で、戦車道の事は解つていただいたと思います。しかし、もつと戦車道の事を知ってもらう為に、ゲストの方に登場して頂きたいと思ひます。どうぞ！」

柚子に射していたスポットライトが消え、新たに舞台袖にスポットが当たる。

そして、そこに登場したのは

「皆様、御機嫌よう」

真つ赤なタンクジャケツトを纏つたダージリンの姿であつた。

優雅に、華麗に、ティーカップを持ちながらダージリンは舞台中央へと歩を進める。

そして、マイクの前に立つと

「……こんな言葉を知っているかしら？ ……坊主まる儲け」

妙な言葉を口にした。

それと同時に、ソーサーに置いたティーカップがカタカタと音を立てる。

その瞬間、舞台袖に視線を向けるダーズリン。

袖には河嶋桃が陣取り、無声で言葉告げる。

その意味は……「がんばれ」である。

舞台上のダーズリンも同様に「むり」と口パク。

「がんばれ」

「むり」

「がんばれ」

「むり」

何度も同じやり取りが繰り返さ

れ、最後には

「もう無理だよ、桃ちゃん先輩！」

ダーズリンが、いや、聖グロリアーナのコスプレをさせられた美沙姫が弱音を吐いた。

生徒会長 角谷杏の行動は早かった。

美沙姫が弱音を吐いた瞬間

「小山、幕を下ろせ！ 河嶋はみさきちの回収！」

そして、自身は舞台上へと走り出した。

緞帳の下りた舞台にさっそうと滑りこむと、パチンと手を合わせ

「戦車道の事は解ったかな？ ゲストの人に拍手！」

素早く生徒達を煽った。

言われた生徒達は、訳も分からずパチパチとまばらに拍手を送った。

「もう一回！ 拍手！」

さらに煽る生徒会長。

恐らく満足するまで何度でもするのだろう。

それが解っている二年生、三年生の生徒達から割れんばかりの拍手が起きる。

それに釣られて、何も解らずに一年生からも大きな拍手が送られた。

「やめ！」

両手を水平に上げ、終了と杏は言葉を響かせる。

その瞬間、体育館は静寂に包まれた。

「おつかれさまー。ほんじゃ、戦車道、よろしくねー。解散！」

こうしてドタバタなオリエンテーションは終了した。

教室へと帰って行く生徒達の会話は、最後に現れた人物に集中していた。

誰なのか？ と疑問を抱く者。

あれは、聖グロリアーナのダーズリン様だと言い張る者。

「田尻さん」

「みさきち」

「美沙姫殿」

美沙姫の今後を憂う者、様々に。

「秋山先輩？」

「五人しか居ないじゃ無いか！」

角谷杏の言葉に、小山柚子が続き、美沙姫が秋山優花里の名を告げ、河嶋桃が絶望した。

「五人かあ。戦車道やるには苦しいなあ」

寂しさを感じさせるトーンで、角谷杏が呟く。

「そんなに戦車がやりたいならさあ」

「やりたいなら？」

美沙姫の言葉に、生徒会の三人がオウム返しに口を開く。

「あれでいいじゃないですか？」

「あれ？」

「そう！ 少人数での戦車戦！ 無茶！ 無謀！ の最前線！ その名は……」

「その名は……」

強襲戦車競技
「タンカスローン」

美沙姫は天井を指差し、堂々と告げる。

しかし、生徒会長の表情はすぐれない。

そして一言だけ

「それじゃあダメなんだよねー」

疲れた様な言葉だけが室内に響いた。

やれる事はやった。

後は結果を待ち、次の策を探る。

角谷杏は、一人で全ての罪を背負う事を決めた。

どんな事があっても、どんな事をしようと、此処、大洗女子学園に戦車道を復活させると。